

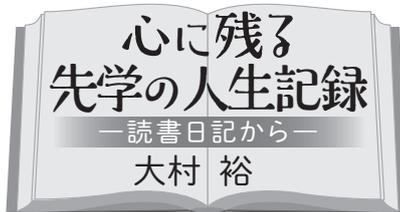
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.195  
2019.12.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第13回

## 河上 肇『自叙伝』I~IV巻

(世界評論社 1947年~1948年)

今回は以前紹介した江馬修をはじめ、唯物史観に立った考古学研究者に少なからぬ影響を与えていた、マルクス経済学者・河上肇(1879~1946年)の『自叙伝』について書く。

私よりも年長の世代には、河上に対して畏敬の念をもつ者が少なからず存在すると思われる。河上が京都帝大教授の地位にあった時には、彼の自邸前を通る京都帝大の学生たちは門の前で脱帽して敬意を表していたというし、彼の講義はいつも満員で、経済学部以外の学生や学外のインテリ等も聴講に来ていたために座席がなくなり、立ってノートを取る者が沢山いたという(宮川實「学者としての河上先生」『回想の河上肇』世界評論社 1948年)。ちなみに彼の代表作の一つの『貧乏物語』は、私の手元にある文庫版を見ると、2008年現在で「第70刷改訂版発行」とある。河上の支持者が今でもいかに多いか想像がつくであろう。

本書は、I巻が幼少年時代から「労農党解消運動」(1930年)までの回顧、II巻が労農党解消後の日本共産党入党、「地下時代」、そして検挙・公判・下獄までの概略(1930~1933)、III巻が自身を「本田弘蔵」という仮名にした小説風の獄中記(1933~1937年)および出獄後の生活、IV巻が「思ひ出・断片の部」という随想集となっている。なおIV巻の巻末には年譜・著作および全四巻の索引が掲載されており、彼の人生を俯瞰出来るようになっている。ここでは、浩瀚なこの自叙伝を通読した感想をとりまとめて記載することとする。

河上は不器用な男である。決して頭脳明晰ではないと自身も認めている。東京帝大の法学部卒の学歴を持つが、「銀時計組」ではなかったし、卒業後すぐ大学の教員になれたわけでもない。東京帝大農科大学の講師や専修学校、専門学校・学習院の講師や読売新聞の記者などを経て、1908年に京都帝大法科大学の講師となり、やっと学者としての地位の安定を得たのである(I巻「鈍根の私」)。なお翌年には助教授に昇任、1913年にはヨーロッパに留学(留学中に法学博士の学位を取得)、1915年帰朝後京都帝大の教授となっている。

幼少期は、意外なことではあるが、祖母や父から溺愛され、我儘放題な日々を送っていたという。父忠左衛門は、母のいわ子(肇にとっては祖母)にあくまで忠実で、生涯逆らったことがなかったという。結構なことだが、肇の実母が祖母の気に入らなかつたかして、無理やり離縁されてしまったのに、夫として何の抵抗もしなかつたのは頂けない。その時、既に肇は母のお腹の中にいたのである。母の実家で無事出生すると、父親は跡取り息子として肇を引き取りに来る。河上家では、乳母が雇われるが、その女性がひどい喘息もちであったことを理由に祖母から解雇されたため、肇は重湯などで育てられたようである。彼の「人並はずれて劣弱な体」の原因の一つはここにあつたかもしれないと回顧している。ちなみに祖母はかなり横暴で無軌道な女性であつたようで、肇の実母を追い出した後、息子の後妻を迎えたのであるが、肇の異母弟が

生まれると、この継母が肇をいじめまくつたため、彼女を河上家から追い出し、何と肇の実母を呼び戻して息子と再婚させているのである。酒に溺れたり、「若いつばめ」を困つたりするなど、したい放題であつた。一方、祖母に従順であつた父は、外ではかなり横暴なふるまいをしていたらしい。彼は山口県錦見村村長を経て岩国町の町長をしていた有力者で、その管理下にあつた小学校の職員たちは、肇を腫れ物にさわるように特別待遇をしていたという。肇に悪い点数をつけたある教師が担当を外されたという噂がもし本当なら、家の外での父の横暴さはかなり度を越したものとさえいえる。登下校に際しては、父の命令を受けた役場の「小使」が、毎日いやがる肇をおんぶして家と学校の間を往復していたというから、父の公私混同は常軌を逸している(I巻「ひどかつた幼年時代の我儘」「溺愛された小学校時代」)。このように横暴な祖母と父ではあつたが、肇が癩癩を起すと、彼女らはすげすごと物置の中に避難し、癩癩が収まるのを待っていたという。

河上のような幼少時体験をした者は、こらえ性がなく我儘な大人になって行くと想像されがちであるが、その全く逆で、「一本気な、情熱的な、純真な、求道的な、自己批判的な、良心的な、馬鹿正直な、尊敬すべき学者」(I巻「私に対する或る批評」)になつたのは実に不思議な次第である。しかも河上の生涯で一貫して流れていた精神は、「絶対的非利己主義」と真理に対する服従、というものであつた。例えば20代の頃、真宗僧侶の哲学者伊藤証信が主唱する「無我の愛」に接するや、既に妻子があつたにも拘わらず、一切の教職を捨てて、伊藤が主宰する「無我苑」に飛び込んでいく。「無我の愛」というものは、「全力を献げて他を愛する」主義だという。河上は、伊藤の所説に強く心動かされ、彼の説く思想が「絶対的真理」と映り、すべてを投げうってこの運動に身を投じたのである。そしてさらに50歳を過ぎた頃、関心が「ブルジョア経済学」からマルクス経済学へと転化するや、京都帝国大学教授の地位と名誉を捨て、実際活動に深く関わることになる。日本共産党に多額の寄付をするだけでなく(立花隆によれば、その総額は現在の貨幣価値に直すと1億円近くになるという:『日本共産党の研究』(2)講談社文庫1983年)、ついには共産党入党を果たし、その直後、家も家族も捨てて、100日余の「地下生活」に突入したのであつた。挙句の果てに1933年に検挙されて、以後4年余の獄中生活を送ることになるのである。「マルクス主義を信奉すると云ふだけではマルクス主義者でも共産主義者でも在り得ない」(II巻)として、「言行一致」を買おうとしたその誠実な心情には、素直に敬服するものである。なお獄中では模範囚であつたし、取り調べの検事にも刑務所長にも刑務官にも好感を持たれていたのに、刑期が短縮されなかつたのは、実際運動から手を引くことは宣言しても、「マルクス主義の研究を放棄する」ということは最後まで確約しなかつたからであつた(II・III巻)。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第13回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第188回) 三輪敏士 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第10回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「平出 長野縣宗賀村古代集落遺跡の総合研究」篠宮 正 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第10回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 10. トロントからモントリオールへ

1965年の7月に私が日本で6週間の資料収集旅行からもどるといれかわりにイランの遺跡の予備調査に出かけたフィリップも9月半ばに戻ってきて新学期がはじまった。フィリップとダグラスは毎朝一緒に家を出て、フィリップはダグラスを幼稚園に届け、その足で大学の研究室にむかう。私は一足遅れて自分の研究室に出かける。お昼過ぎにお手伝いさんが幼稚園へダグラスを迎えにいつてつれて帰り、お掃除などしながら私どもが戻るまでお留守番という日程だった。この日程が落ち着き始めたころ、トロント大学の人類学科の爆発("Explosion")と学界で噂された大異変がおこった。それは、永年人類学科長を務められた老教授が引退されたその後任を学部長が人類学科の教員と相談なしに外部から招聘したことからはじまり、その新学科長のやり方が独断的なのに反対した若手教員のほとんど全員と中堅層の教授数人を含めた教員の半数以上が辞職するという事態だった。当時は戦後のベビーブームの人口層がちょうど大学生になった時期で、これに対処するため北アメリカの大学はどこも拡張していたときだったから、辞職した教員たちが転職先を見つけるのは難しくなかった。だからこそ勇ましく集団辞職などできたわけだが、一方、"爆発"事件の火元だったトロント大学の人類学科は教職陣の大穴を埋めるのが大変だったろうとおもわれる。

フィリップも辞職組の一員だった。彼はフランスでモヴィウス先生のアプリ・パト発掘の助手をしたり、ソリュートレ文化に関する学位論文を書くためにフランスに数年滞在したりしていたから、英語系カナダ人としては珍しくフランス語でも講義ができる人類学者なので、モントリオール大学から"ぜひ来てほしい"とのお誘いがあった。1965/66学年度の終わる6月末に私ども一家はトロント市からモントリオール市に移動することになった。

モントリオールは現在はトロントに次ぐカナダで二番目に大きい都市だが、1980年頃まではトロントより人口も多く、経済的にもカナダの中心地だった。日本ならこのような大都市には公立、私立の大学が大小様々あるのが普通だけれども、カナダの制度では規模の大きい大学を少数設置するのが通例だ。トロントの場合、私たちのいた頃は市内にはトロント大学だけしかなく、市の北部郊外に1959年に設立されたヨーク大学が、成長中という状態だった。モントリオールには、19世紀からマウントロイヤルの北斜面にフランス語系のモントリオール大学、南斜面に英語系のマギル大学があった。マギル大学の名称はスコットランド出身の毛皮商人、ジェームス・マギルが1813年の遺言でマウントロイヤル斜面に

広がっていた農地に大学を設置することを条件に、かなりの金額をつけてその農場を寄贈したことに由来する。このほかにYMCAが主催していた夜学コースを中核にして1974年に成立したコンコーディア大学(Concordia)に加えて、ケベック大学モントリオール校が1969年に設置されたので、英語



▲McGill大学(筆者撮影)

とフランス語の大学が現在は2校ずつ存在する。私どもがモントリオールに来た1966年に人類学関係のコースを提供していたのはモントリオール大学とマギル大学だけだった。マギル大学でも独立の人類学科はなくて社会学との合同学科だった。人類学側にはハーヴァード大学院で私共の先輩だった社会人類学者のリチャード・ソールズベリー(Richard Salisbury)がおり、考古学者としてはのちに考古学の方法論、考古学史に関して多くの業績をのこしたブルース・トリガー(Bruce Trigger)がイェール大学から博士号を得て1964年にマギルに着任されたばかりだった。

モントリオールに移動する前に、マギル大学の人類学科に教職の可能性について問い合わせたところ、1966/67年度は非常勤のポストもないけれども、その翌年度は研究休暇をとる計画をしている同僚がいるので非常勤講師を探すことになると思われるから、モントリオールに着かれたら連絡してくださいとのことだった。実のところ、それは私にとって好都合のタイミングだった。というのは、1966/67年度は教職についてエネルギーを分散させることなく博士論文に専心するための援助金がハーヴァード大学の女子部であるラドクリフ大学からいただけることになったからだ。1965年の夏、日本各地の研究機関を24ヶ所おたずねして、40名の考古学者、4名の形質人類学者と同じく4名の地質学者からお話をうかがい、重要なデータを多量持ち帰ることができたが、帰国後は講義の準備などに追われて資料の整理が停滞していた。ラドクリフからの援助金のおかげで資料整理に本格的に取り組み、1966年度中に論文に何とか形をつけたいとおもっていた。

昨年夏にお知り合いになった、考古学、形質人類学、地質学の先生方からはその後も文通を通してご親切な御教示をいただいた。特に芹沢長介氏は当時、星野遺跡の再調査などでお忙しいようだったが、福井洞穴の2層、3層、7層、15層や荒屋遺跡の細石器層に関するC-14測定値など重要な新情報が出るとすぐにお知らせくださった。また新井房夫先生は前橋泥流堆積物からえられたラジオカーボン測定値から推定される岩宿文化層の年代について説明してくださったし、小片保先生は更新世出土とされる人骨に関する章の草稿を読んで丁寧にコメントしてください。これらの情報の流れは必ずしも一方交通ではなく、日本の先生方からも「このような石器のヨーロッパでの出土例について知りたい」といったご質問があったり、日本で手に入りにくい文献に関するお問い合わせがあったりした。論文の草稿はかなりすすんだが、地質の章だけで100頁近くになってしまい、この分だと全体は1000頁になるのではないかと、これをどうやって短縮しようかと思案していたころへ、マギル大学から連絡があり、1967/68年度の冬学期に非常勤講師として文化人類学入門の講義を受け持つてほしいというお話があった。こうしてマギル大学との長いお付き合いがはじまったが、学位論文の進行はまたしても遅れることになった。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学科卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会科学部社会学専攻修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部)【現在ハーヴァード大学に合流】修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## Uレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 188

## 蟻無山古墳群 ～兵庫県赤穂市～

三輪 紘士

私が紹介するのは、兵庫県赤穂市有年原に所在する蟻無山古墳群です。当古墳群は、有年原の通称「奥山」から南西に突き出した独立丘陵上に立地し、3基の古墳で構成されています。

蟻無山古墳群が所在する有年地区は赤穂市でも特に遺跡が密集する地域で、弥生後期の陸橋部・突出部を持つ円形周溝墓と大型装飾器台で著名な有年原・田中遺跡をはじめ、弥生から古墳時代にかけての大規模集落が確認された東有年・沖田遺跡、赤穂市内唯一の前期前方後円墳を含む放亀山古墳群、石棚を持つ後期古墳の木虎谷2号墳、玄室に間仕切り部を持つ特殊な石室を持つ塚山6号墳など、多彩な文化財が存在します。

蟻無山1号墳は、従来は全長52mの造出し付きの円墳とされてきましたが、赤穂市教育委員会が2011年に実施した測量調査によって、全長52m・円丘部径44m・突出部長8m・造出し部長10m、二段築成で、南側に突出部を持つ、東側に造出しを持つ「造出し付き帆立貝形古墳」であることが明らかになり、千種川流域で最大の中期古墳であることが判明しました(赤穂市教委2011)。同時に、1号墳墳頂部下斜面に葺石が良好に遺存しているのが確認され、所在が不明となっていた2号墳・3号墳の位置と規模・墳形も判明しました。

発掘調査は行われていませんが、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(家、馬、鳥、盾、蓋、鞆、船)、初期須恵器、土師器等多数の遺物が採集されています。このうち馬形埴輪は頰革・引手等の馬具、たてがみ・歯等の表現が写実的で、国内で最古級と評価されます。また船形埴輪片にはスイジガイとみられる線刻表現があります。同様の表現を持つ埴輪は岡山県金蔵山古墳、大阪府仲津山古墳、大分県亀塚古墳等西日本を中心に分布しており、王権との関係を指摘する説もあります(岸本2016)。

古墳に伴う土器は埴輪に比べ少量ですが、1号墳で採集された須恵器高杯形器台、2号墳で採集されたと伝わる須恵器甗及び直口壺、土師器甗があります。特に須恵器高杯形器台は、ロクロ回転を用いずに密な波状文を描いています。これは陶邑窯跡群では確認されておらず、兵庫県内では赤穂郡上郡町竹万宮ノ前遺跡、たつの市長尾十郎谷遺跡、加西市小谷遺跡、姫路市前田遺跡、大阪府では寝屋川市讃良郡条里遺跡でのみ確認されている特殊なものです。近接する有年原・田中遺跡では韓式系軟質土器とともに、焼け歪んだ初期須恵器が出土していることから、付近に初期須恵器の窯が存在した可能性が指摘されています(植野1994、藤田ほか1994)。その場合、蟻無山古墳群の初期須恵器はこの近辺で生産された可能性もあり、注目されます。

当古墳群の時期は、採集資料から、1号墳は陶邑編年(山田2011)でTG232~TK73型式併行期、埴輪編年(川西1978)でⅢ-2~Ⅳ期に相当すると考えられ、2号墳・3号墳はTK216型式併行期と考えられます。

豊富な内容を持つ蟻無山古墳群は、千種川流域のみならず古墳時代中期の播磨を考えるうえで欠かせない古墳であり、多くの論文で取り上



▲蟻無山1号墳・南からみた突出部・円丘部(筆者撮影)

げられています。また2014年から2016年にかけて赤穂市教育委員会が実施した有年原・有年牟礼地区での悉皆的な分布調査で、蟻無山古墳群に後続すると考えられる初期群集墳(奥山古墳群)の位置と規模が確定するなど新たな成果も加わりつつあり(赤穂市教委2017)、研究の対象としてさらに価値が高まっています。

ところで蟻無山という風変わった名称は、古くは宝暦七(1757)年成立の『播州赤穂郡志』にみられます。宝暦十七(1762)年前後に成立した『播磨鑑』によると、「この山には蟻がおらずその土を持ち帰って別の土地に入れると蟻が生じない」と記され、この伝承が山名の由来になったと思われる。それを基にした民話が後に作られ、地元の小学校で演劇の題材に取り上げられたり、幼稚園や小学校の校歌に「ありなし山」の地名が用いられたり、地域のシンボルとして親しまれてきました。

私は有年で生まれ育ち、小学校の頃に考古学を知って以来、近所の田畑や山を歩き回っては土器の破片をポケット一杯に拾って帰る、という少年時代を過ごしてきました。そんな私ですが、校歌や有年考古館の展示で強く惹かれていたにもかかわらず、蟻無山に近寄りたがたい雰囲気を感じてなかなか一人で行くことが出来ずいました。もちろん、今ほど登山道が整備されておらず、背丈ほどもある薄暗い藪の中へ入ることへの恐怖もあったのですが…。意を決して何度か祖父と山頂へと登りましたが、薄暗い木立であり、古墳の知識もほとんどない頃で、どれが何なのかわからなかったのです。

そんな私でしたが、高校生の時に実施された測量調査の現地説明会で、ようやく蟻無山古墳群の姿をはっきり理解しました。間伐で見通しが良くなった古墳は葺石がそのまま残り、突出部や造出しがほとんど崩れず美しい墳形を保っていることに驚き、開けた墳頂に立った時、そこからの眺望に圧倒されました。自分の住むすぐ近くに、約1600年前の巨大古墳が今も残っているという事実に感動し、もっと深く歴史について学びたいと真剣に思いました。この時の経験が、考古学を本格的に学ぶ大きなきっかけとなったのです。

高校卒業後県外の大学・大学院へと進み、地元へと戻った現在も、時折蟻無山に登っては色々なことを考えます。またこの古墳がひとつの縁となって、多くの研究者の方々とお会いする機会にも恵まれました。

学史的・地域的に重要なのはもちろん、私個人にとって、考古学を志すきっかけとなった、大切な遺跡の一つです。

## 参考文献:

- 赤穂市1981『赤穂市史』第一巻
- 赤穂市1984『赤穂市史』第四巻
- 赤穂市教育委員会1991『有年原・田中遺跡』
- 赤穂市教育委員会2006『木虎谷11号墳発掘調査報告書』赤穂市文化財調査報告書64
- 赤穂市教育委員会2011『蟻無山古墳群・塚山古墳群・周世宮裏山古墳群 測量調査報告書』赤穂市文化財調査報告書73
- 赤穂市教育委員会2017『有年地区埋蔵文化財詳細分布調査報告書-有年原地区・有年牟礼地区-』赤穂市文化財調査報告書84
- 赤穂市教育委員会2019『放亀山古墳群調査報告書』赤穂市文化財調査報告書88
- 荒木幸治2016『「播磨の中期古墳編年試案」補足解説』『有年考古』第3号 赤穂市文化財調査報告書83 赤穂市立有年考古館報告書第3冊 赤穂市教育委員会
- 植野浩三1994『兵庫県千種川中・下流域の初期須恵器』『韓式系土器研究』Ⅴ 韓式系土器研究会
- 川西宏幸1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学會
- 岸本道昭2000『播磨の前方後円墳研究序説-測量調査と集成による基礎作業-』『播磨学紀要』第六号 播磨学研究所
- 岸本道昭2013『古墳が語る播磨』のじく文庫 神戸新聞総合出版センター
- 岸本道昭2016『蟻無山1号墳を考える-海を渡った有年の英雄-』『有年考古』第3号 赤穂市教育委員会文化財調査報告書83 赤穂市立有年考古館報告書第3冊 赤穂市教育委員会
- 田辺昭三1966『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- 中久保辰夫2017『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会
- 西播磨史研究会1991『有年考古館蔵品図録』
- 播磨考古学研究会2017『播磨の埴輪』第17回播磨考古学研究会の記録
- 藤田忠彦ほか1994『有年原・田中遺跡出土の初期須恵器と軟質土器』『韓式系土器研究』Ⅴ 韓式系土器研究会
- 松岡秀夫1962『播磨千種川流域の古代遺跡について』『考古学研究』第9巻第1号 考古学研究会
- 松岡秀夫1979『赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年』『考古学研究』第26巻第2号 考古学研究会
- 山田邦和2011『須恵器の編年 ①西日本』『古墳時代の考古学』1 同成社
- 山中良平2019『1 論考 蟻無山の「むかしばなし」-蟻無山古墳群にまつわる民話について-』『有年考古』第6号 赤穂市文化財調査報告書89 赤穂市立有年考古館報告書第6号 赤穂市教育委員会

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは林弘幸さんです。

## 考古学者の書棚

## 「平出 長野縣宗賀村古代集落遺跡の総合研究」

平出遺跡調査會編／朝日新聞社(1955)・[復刻]長野県文化財保護協会(1977) ————— 篠宮 正

今年9月に発掘報告書作成についての県内新人職員向け研修を担当することになり、研修の一コマとして「発掘調査報告書の構成と内容」について講義を行った。発掘調査報告書を作成するにあたって、発掘調査報告書の構成と内容について講義するものであったが、近年、文化庁文化財部記念物課監修「発掘調査のてびき 整理・報告書編」／同成社(2010)が出版され、詳細な内容であるため講義のテキストの一部として活用させていただいた。

ここでは、報告書の構成として、本文に第1節 調査の経過、第2節 遺跡の位置と環境、第3節 調査の方法と成果、第4節 総括と後付に報告書抄録を挙げており、各節には詳細な項目が設けられている。

ただし、この内容だけであれば本を読めば事足りるのである。また、それ以前、小生が考古学をかじり始めた頃の発掘調査報告書の構成や内容については「野外考古学」大井晴男／東京大学出版会(1966)や「発掘調査の手びき」文化庁文化財保護部編／国土地理協会(1966)に簡単に触られている。

「野外考古学」では報告として、i遺跡の位置、ii発掘の目的、iii遺跡の現状、iv調査の経過、v遺構の記載、vi遺物の記載、vii発掘の成果を挙げている。

「発掘調査の手びき」では報告書記載の要件として、1)遺跡の名称と所在地、2)遺跡を調査するにいたるまでの経過、3)調査の経過、4)遺跡、遺物の記述、5)遺構・遺物の考察を挙げている。

その後、開発に伴う発掘調査が増加した以後の考古学の調査方法の概説書が「考古学調査研究ハンドブック2室内編」岩崎卓也・菊池徹夫・茂木雅博編／雄山閣(1984)や「発掘と調査の知識」服部敬史／東京美術(1985)などが出版された。「考古学調査研究ハンドブック2室内編」では報告書の構成で、○調査にいたる経過および調査の経過、○遺跡の所在・立地、○遺跡とその周辺に関する研究の現状・研究史・考古学的環境、○遺跡・遺構の説明、○遺構と遺物の関係の説明、○遺物の説明、○遺跡・遺構・遺物等に関する研究・考察・結論、○欧文要旨と詳細には書いてあるがほぼ従来の内容を踏襲している。

このような中で、「発掘と調査の知識」では報告書作成について、「今まで出版された優れた報告書を参考とすることが良いと思われる」と簡単に書かれたのみである。これは基本的な上記概説書にあるような記述内容を満たしていれば、既刊の報告書を参考にすべしということであり、これは報告書作成についてだけでなく、発掘調査方法や出土品整理についても参考にすることを薦めていると思う。

自分に振り返って見ると、多くの報告書を読み、調査方法や図面や写真の掲載方法、まとめ方など良いと思う点を参考にさせていただきながら、自分なりに発展させ発掘調査方法や報告書作成をしてきたつもりである。

その原点となった報告書は、「平出 長野縣宗賀村古代集落遺

跡の総合研究」である。

なぜ、「平出」なのかというと、平出遺跡が存在する平出は母の生まれ育った集落だからである。比叡ノ山の東麓にある平出の泉から湧く水が水路を流れ、水路に沿って集落が発展している。水路の水は洗い物に利用したり、水を引き込んだ池には鯉が泳いでいた。この水路は古とは流れを変えている可能性はあるが、縄文時代から現代まで集落を潤してきた流れである。

平出を訪れた際は、比叡ノ山や平出博物館、伊夜彦神社などで従兄と遊んだことを鮮明に覚えている。比叡ノ山の傾斜は子供が遊ぶのにはちょうど良い傾斜であった。また、博物館も復原竪穴住居(これらは単にイセキと呼んでいた)も遊び場であり、遺跡・遺物に親しんだ。また、桔梗ヶ原葡萄の産地でもあり、秋には葡萄の甘い香りや味覚を楽しんだ。

環境に恵まれた小生は、小学生の時から土器や石器を拾い集め、考古学に足を突っ込んでしまった。

特に参考にしたのは、家にあり出版されてすぐの「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第2巻 歴史 上」／東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会編(1973)であるが、母の生家から「平出 長野縣宗賀村古代集落遺跡の総合研究」を借り読み漁ったのはいうまでもない。幸いにも高校に入った年に長野県文化財保護協会から復刻されたので、早速購入した。

この「平出 長野縣宗賀村古代集落遺跡の総合研究」は単なる発掘調査成果の報告にとどまらず、考古学を始め地学・古生物学・建築学・社会学・民俗学・歴史学の専門家による平出地域の総合的研究として作られたことが特筆される。

平出遺跡は昭和27年に史跡指定され保存されてきたが、当時は遺跡の一部しか調査が行われていなかった。このため正確な遺跡の範囲を確かめるため塩尻市教育委員会によって、昭和54年から範囲確認調査が行われた。ちょうど大学生であったため参加し、良い経験をさせていただいた。

現在の平出遺跡は、博物館と復原住居だけではなく、平出遺跡整備基本計画に従い平出遺跡公園が復元整備され、学習施設が建てられ、新しい地域の歴史が作られている。

開発に伴う発掘調査では、「平出」のような調査体制や報告書の内容の記述は難しいが、発掘調査にかかる事前調査や報告書作成において地質・地形・民俗・文献など地域史を総合的に理解した上での発掘調査や出土遺物の考察など関連分野からの協力を報告書作成に加えることが必要であると思う。

「発掘調査のてびき 集落遺跡発掘編 整理・報告書編」は現時点での最良のテキスト・基本ではあるが、新たな視点、大きな視野に立った新たな発掘調査方法や発掘調査報告書作成を模索していかなければならないと思う。

## アルカ通信 No.195

発行日	2019年12月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp